

足摺岬山上・海軍足摺探信所軍事施設の測量調査

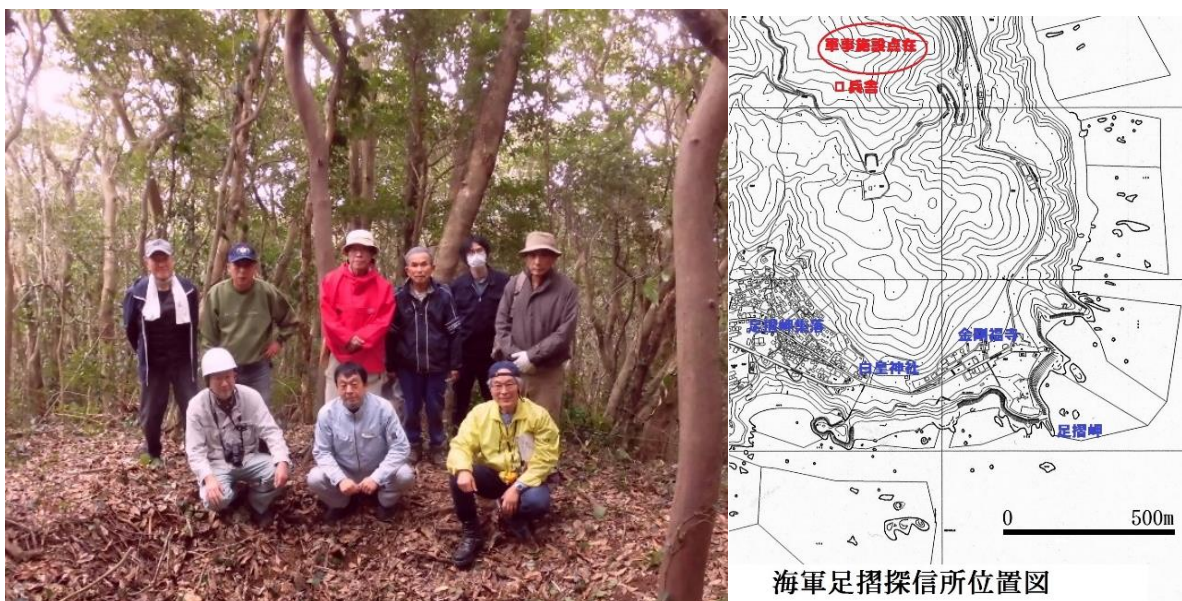
今月11・12日(木・金)の2日間、戦争遺跡調査のため市史編集委員出原恵三氏と調査協力員大原純一氏が来市し、足摺岬山上の海軍足摺探信所の測量調査を実施した。今回が公的には『市史』調査の最終となる見込みである。

ここでは、海軍のレーダー基地が山上に多く点在しており、待避壕や銃砲台・弾薬庫・兵舎・受信所などの軍事施設が分布している。これらの施設に覆われている埋土や枯れ葉などを除去・清掃し、写真撮影・測量調査を実施した。

この施設は、昭和17年(1942)に海軍が朝鮮人強制労働、女子挺身隊・地域住民の協力を得て、造ったものである(『伊佐国民学校日誌』や故・山田泉氏などの証言から)。まずは新『市史』に図面や証言をまとめるなど、この記録を地道にかつ確かに保存していかなければならない。

今回の調査に当たり、調査実施者・補助者及び協力者は、次の方々である。

- 【調査実施者】 出原恵三(市史編集委員) 大原純一(市史調査協力員)
 【調査補助者】 田村公利(市史編さん室長) 由岐直久(市史編さん室係長)
 吉本工心(市史編さん室係員)
 【調査協力者】 武藤 清(土佐清水市郷土史同好会会長)
 東近 伸(土佐清水市郷土史同好会顧問)
 西田和啓(同会副会長兼事務局長) 遠見早稲(同会事務局次長)
 井上 章(同会会員・土佐清水市自然史研究会会長)



前列左から出原・田村・大原、後列左から武藤・西田・遠見・井上・吉本・東近、撮影者は由岐。

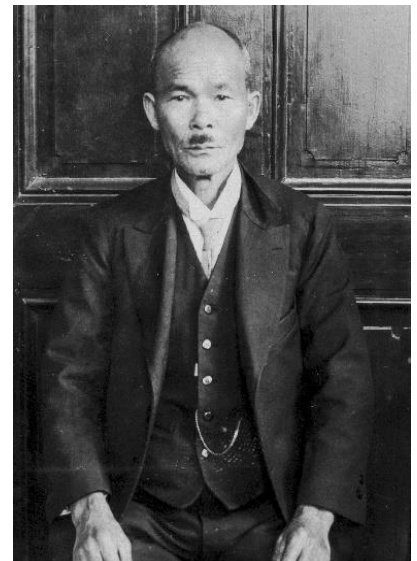


左写真は 11 日に埋土除去した受信所付近の測量の様子。右写真は 12 日に埋土を除去して清掃した軍事施設の建物基礎遺構を写真撮影する出原委員

「市史執筆のブレイクタイム(26)」 おき やしお よしおみ “沖 八潮・良臣親子”

(1) 沖 八潮 (1874—1947)

沖八潮は明治 7 年 (1874)、幡多郡三崎村に生まれた。布小学校中等科を卒業し、明治 26 年 (1893) 2 月 10 日に伊佐尋常小学校臨時教員 (准訓導) に採用される (19 歳)。高知県尋常師範学校へ進学し、明治 30 年 (1897) 3 月 19 日に卒業した。その年、4 月 1 日に正規教員 (訓導) として三崎尋常小学校に採用された (23 歳)。その後、長年にわたり三崎村やその近隣町村で教職にあった。明治 32 年 (1899) から下益野尋常小学校初代校長 (昇任時 25 歳)、明治 34 年 (1901) 4 月 1 日から清水尋常小学校第 2 代校長、明治 37 年 (1904) から三崎尋常小学校長などを 20 代後半から 30 代にかけて歴任した。前節で紹介した若き日の上田庄三郎は、新米教員としてこの生真面目な沖八潮校長の下で教育活動に励んだ。



(写真1) 沖 八潮

三崎尋常高等小学校校長時代に融和運動に力を入れた。明治 43 年 (1910) 青年夜学会を設立し、寺社を会場に 1 ヶ月に 10 日程度夜間、修身・読み方・算術・習字・綴方の講義を行った。愚直なまでに実直な八潮の次のようなエピソードがある。風雨の激しい夜学会の晩に「こんな風雨の激しい日だから八潮先生は来ないだろう」との青年たちは話していた。ところが、ずぶ濡れになりながらもキビキビとした足取りで八潮が会場に姿を現した。これには青年たちも目を丸くして驚いた。八潮の行動力は留まることを知らず。翌年 (1911) 婦人会を設立、主婦の研修の場を広げて修身・道徳を中心に講義するに至った (註1)。

このような中、大正 8 年 (1919)、八潮は突如として家族を連れて朝鮮半島に渡り、朝鮮公立普通学校の教員を勤めた (45 歳)。なぜこのような思い切った転出に及んだのか。その明確な理由は今もって不明である。この点は、当時の世相・時代背景を八潮自身の人生観・生き方とオーバーレイしながら、今後の検討課題として慎重に研究していく必要がある。八潮は一旦、大正 11 年 (1922) に帰国して再

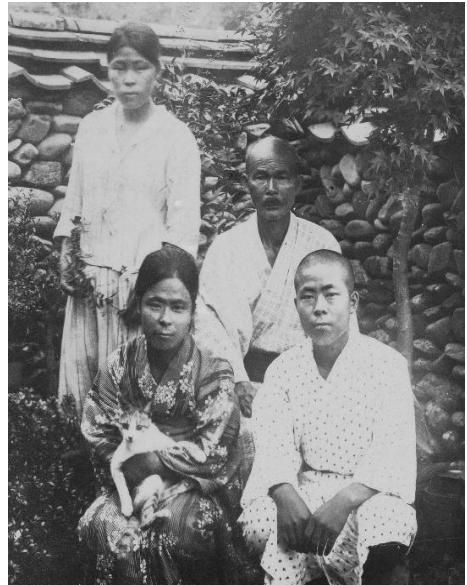
び渡朝、その後、昭和2年(1927)まで滞在し、三崎に帰省した(53歳)。帰省後は、融和運動に軸を置き、公道会役員、三崎青年団・渭南地区青少年団の顧問、司法保護委員などを歴任し、地域のために広く貢献した(註2)。

(2) 二男・沖 良臣(1911—1940)と親子愛

沖 良臣は、八潮の二男として明治44年(1911)に三崎村に生まれた。八潮には、良武(長男)、文恵(長女)、治美(二女)、良臣(二男)ら4人の子どもがおり、その兄弟姉妹は皆仲が良かった。

良臣18歳のとき、突如病魔が襲った。昭和4年(1929)中村中学校在学中のことであった。急性肺炎を起こし、約3ヶ月間入院した。その間、生死の境を彷徨し、1年間休学と療養生活を余儀なくされた。しかし、病状が思うように好転せず、止むを得ず退学することになった。三崎の自宅に戻り気長く療養することになった(註3)。

その間、兄良武が、弟の退屈を紛らわすため写真機をプレゼントした。写真機はまだ今日のように社会に出回っておらず、当時は大変高価な物であったに違いない。良臣は写真機に興味を持ち、関係書籍を読みあさった。そして、撮影を繰り返す中で経験を重ね、その撮影技術を上達させた。やがて良臣は、高価な営業用の写真機を調達した。東京の医大に進



(写真2)父八潮と姉(前・文恵と後治美)と写真に収まる良臣



(写真3)病床の良臣(昭和15年2月頃)

学した姉文恵に依頼して購入したものである。良臣は暫時それを自由に使いこなせるようになった。この頃には、まだ三崎村や下川口村などに写真店もなかった。益野・下川口・宗呂・貝ノ川・大津などに撮影依頼を受け、良臣はしばしば営業に行くことが増えた。また、趣味の延長として始めた印判掘りもメキメキと上達し、それを販売できるようになった。それが高じてゴム判も彫るようになった。これは写真業と併せてとても繁盛したようである(註4)。

現在、三崎支所や竜串福祉センターに残る三崎地区周辺の古い景観写真は、高知市自由民権記念館に所蔵されている沖家のアルバムと同じ写真が何枚か散見される。このことから、これらは昭和初期に良臣が撮影したものと思われる。

病弱な中でも自分の趣味が高じて多忙な日々を過ごしていた良臣であったが、昭和14年(1939)末頃から、風邪がもとで病状が次第に悪化するようになってきた。

翌15年2月下旬より、看病のため母が隣の部屋で寝泊まりするようになった。姉治美(二女)から弟へ見舞いとしてメロン・パイナップル・蕎麦菓子・カレンダーなどが小包で送られてきた。当時は入手できにくい特上の贅沢な果物が送られ、そこからも弟を思う姉の愛情を感じ取ることができる。良臣の病状は、4月初旬から夜間の喘息発作がひどくなり、痰が多く、発熱もあって少しずつ病状が進行しつつあった。そこから一進一退の日々が続く。自筆の日記には、その状況が記され、5月20日に絶

筆している(註5)。

それから10日余りの6月1日、沖八潮の二男良臣は、29歳の若い生涯に幕を閉じた。短い生涯ではあったが、人生はその生きた長短ではない。無口ではあるが何事にも研究心に富み、写真撮影、ゴム判彫り、貝殻収集などその研究は多岐にわたった。病中も新聞・雑誌・新刊書の購読も怠らず、地元三崎村出身の出征者へ毎日、高知新聞を送り、軍にも献金を行った。



遺言により、写真業などで貯金し(写真4)教壇に立つ沖八潮(青年夜学会の講師で登壇か?)

た金銭を父母や兄弟姉妹に分与した後、海軍や三崎村援護会、高知新聞飛行機、下ノ段警防団、上ノ段地区、三崎小学校、竜串地区などに寄付した(註6)。

それは自分の死期を悟り、最後まで自分を育ててくれたすべての人々へ感謝の気持ちを堅持した生き方からきていた。

昭和12年11月25日「良臣日記」に、父八潮が「良臣が大患した夢を見たので、すぐに手紙を書いてくれ」との葉書が届いた旨が記されている(註7)。八潮が大阪に長期出張中、良臣が病気で苦しんでいる夢を見た。日頃から良臣の病気のことを心配していたのであろう。親とは本当に有り難いものである。父の子に対する深い愛情を感じ取ることができるエピソードである。

引用・参考文献

- ・足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992年。
- ・沖八潮『わが子の思い出』高知県教育センター、1989年。
- ・(写真1)～(写真5)高知市立自由民権記念館所蔵。

註

(註1) 足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992年、370—371頁。

(註2) (註1)に同じ。

(註3) 沖八潮『わが子の思い出』高知県教育センター、1989年。

(註4) (註3)に同じ。

(註5) (註3)に同じ。

(註6) (註3)に同じ、

(註7) (註3)に同じ。

【編集後記】『市史編さん便り(第30号)』をもって本年度の便りの発行を完結したい。来年度初めの「市史編さん・編集合同委員会」は、4月に「東京2020オリンピック聖火リレー」、5月初めに「成人式」が開催される予定であるため、**5月10～14日(月～金)の週**もしくは、**5月24～28日(月～金)の週**で調整していきたいと考えています。4月初旬に調整しますので、あらかじめご承知おきください。